

南アフリカ UFO 撃墜事件（コードネーム：SILVER DIAMOND）

グッチ

はじめに

以下は1989年に南アフリカで起こった UFO 撃墜事件の機密情報を知る人物 A が CSETI に賛同して、スティーブン・グリアに送った文書である：

（この文書は [DPIA\(Disclosure Project Intelligence Archive\)](#) に存在する）

私 A は1989年7月の第1週に南アフリカの情報提供者 B から情報を受け取った。

その趣旨は「1989年5月7日に南アフリカの戦闘機が1機の UFO を撃墜し、UFO はカラハリ砂漠に墜落。無傷の機体と乗員の ET 2 名が生きのまま捕獲され、南ア空軍基地に運ばれた。南ア空軍基地にはすぐさまアメリカのライトパターソン空軍基地から飛行機を飛ばして軍関係者が来訪し調査に加わった」というものだった。

情報提供者 B からは手紙も届いたが、その文面は以下の通りである：

「南アフリカ情報機関はこの案件を独力で扱う知見も施設ももっていない。

基地司令によるとこの宇宙船は過去10年間に南アフリカで回収した3機目の宇宙船になるという。正統的信仰をもつ当国をパニックに陥れないため、この件はすべて非公表とすると言われた。この件で何か進展があったら我々に伝えてくれるそうだ。この手紙が直接貴兄に届くことを願っている。もし差し押さえられたら私Bは大きなトラブルに見舞われる。この手紙を受け取ったらすぐに知らせてほしい。南アフリカ政府のブリーフィング要旨のコピーは別便で送る。私Bの名前やアドレスを書類に添えることは差し押さえられる場合に備えてやめておく。」

私Aは数週間後、南アフリカから手紙と5ページのブリーフィング書類が入った小包を受け取った。

書類の最初のページ上部に南アフリカ空軍の紋章があり、見出しは「**UFO 調査日誌**」だった。

〈このファイルは空軍情報部局 D.A.F.I.によって分類された。この情報は他言禁止のトップシークレットである。〉

次のページも南アフリカ空軍の紋章がついており、そのページの見出しは

「分類：トップシークレット」で、他言禁止とある。



その下に「特別調査研究部門」とあり、その下にさらに「空軍情報部局
DAFI」とある。あとは以下のように記載されていた：

(注：以下は B から A に届いた南アフリカ空軍情報部局のトップシークレ
ット・ファイル「UFO 調査日誌」だが、その 5 ページのブリーフィング書類の
うち最初の 1, 2 ページのページ数は記載されていない。以下の冒頭は 1 ペ
ージ目と思われる。)

年月日：1989 年 5 月 7 日

案件：未確認飛行物体

コードネーム：黒馬(Black Horse)

到着地：プレトリア空軍基地

指定：レッド/ トップシークレット

アクセス制限：Illuminated Nine

優先度コード：D4

色分け：青

コンピュータ・パスコードの守備 — 注意して行うべし

次のページ（注：2 ページ目と思われる）は以下の通り：〔軍の調査員が挿入した*印は氏名や場所の変更を意味する〕

「1989年5月7日13時45分（GMT グリニッジ標準時）、海軍のフリーゲート艦ホワイトスワン号がケープタウンに無線連絡し、航行中レーダースコープにアフリカ大陸に向かって算定速度・時速5746海里（1万642km）で北西方向に飛ぶ未確認飛行物体を捉えたと報告した。

海軍司令もその物体を飛行機搭載レーダー、南アフリカ軍の地上レーダー、民間空港でも追尾したことを是認・確証した。

13時52分（GMT）に物体は南アフリカの空域に入った。物体との無線によるコンタクトを試みるも、いかなる交信も不可能だった。

その結果2機の武装した戦闘機がスクランブル発進した。その直後、物体は通常の航空機には不可能な猛スピードで方向転換をした。

13時59分(GMT) 指揮機のパイロットである飛行中隊長ジョーンズ*が物体をレーダーと目視の双方で捉えていると報告した。そこで機体に実験的に搭載した雷神2レーザー機関砲(experimental aircraft-mounted Thor 2 laser cannon)を起動し発射せよという指令が下った。そしてそれが実施された。

(注：この極秘文書をグリアに渡した人物Aのグリアあてのメールではレーザー-laserではなく maser と書いている：experimental maser cannon。maserは「microwave amplification by stimulated emission of radiation 電磁波の誘導放射によるマイクロ波の増幅」の意味。いずれにせよ電磁スカラーパルス砲の実態が分からないままとりあえず「Thor 雷神」の名を冠し、laser だの maser だのと呼んでいるように思われる)。

中隊長ジョーンズの報告によると、物体は船体がゆらぎ始め、北方向に進みながら目がくらむ閃光を何回も発した。14時02分、物体は毎分3000フィート(約900m)の下降速度で高度を下げた。そして角度25度で急速に下降し、南アフリカとボツワナの国境から80マイル北の砂漠地帯に落下した。そこはカラハリ砂漠と確認された。中隊長ジョーンズは回収チーム

が到着するまで落下現場一帯を立ち入り禁止にするように指示された。空軍情報将校たちのチームがすぐさま医療と技術スタッフを伴って墜落地点に派遣され、調査と回収に従事した。現場で見つかったものは以下の通り：

- 1) 直径150 m、深さ45 mのクレーター
- 2) クレーター内に45度の角度で突き刺さった銀色の円盤
- 3) 物体周囲の砂や岩石が高熱のため融合していた。
- 4) 物体周囲を取り囲む高い磁気と放射能のため空軍の装置に電子的損傷が生じた。
- 5) 物体はさらなる調査のため、最終的にある空軍基地に運ばれた。
- 6) 墜落地点のクレーターはそこで起こった出来事の痕跡を消すために砂と砂利で埋められた。

3 ページ (宇宙船の仕様)

以下は空軍基地での予備調査が示した宇宙船の仕様である。

タイプ：不明—おそらく地球外のもの

起源：不明—おそらく地球外

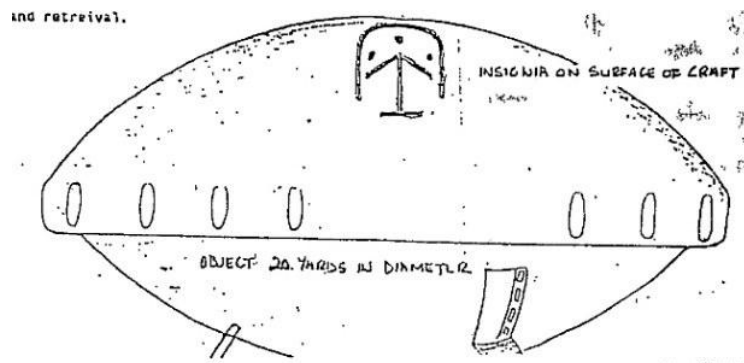
識別可能な記号：なしー 船体側面の金属に鍛造された奇妙な記号がある

サイズ：横幅 — 約20ヤード（18m）、高さ — 約9.5ヤード（7.9m）、重量— 約50トン。

建造素材：不明—今後の調査待ち

〇〇〇〇（注：ページの端で判読不能）：船体外周に12の〇〇〇（注：判読不能）卵型の丸窓が間隔不均等に開いている。

動力：不明。研究結果待ち



（注：ブリーフィング要旨に掲載された図。これらは UFO 回収を手伝った目撃者が2体の異星人と UFO の図を描いて送ってきたもの。UFO 上部にある印はニューメキシコ州ソコロ市で警部が目撃したものとほとんど同じだとい
う。）

メモ：

油圧式タイプの着陸装置が伸びきってしまっている。このことは過去に電子的故障が物体を機能停止に追い込んだことを示唆している。おそらく雷神2レーザー砲の放射が船体に命中したせいだろう。

(注：超先進的ハイテクノロジーで作られているはずのET宇宙船に地球式のローテクな油圧式システムが使われているのはおかしい。着陸装置のシステムが分からないのでとりあえず、油圧式タイプと呼んだ可能性がある。)

調査チームが空軍基地で物体を観察しているとき、大きな音が聞こえた。その後船体下部のハッチ/入り口がわずかに開いたまま、動かなくなっている様子が認められた。

この半開きのハッチはあとで油圧式ジャッキを使って全開にした。

4 ページ

- a) タイトなグレイのスーツを着た2体のヒューマノイド型生物が宇宙船から現れ、すぐさま野戦医療センターに移送された。
- b) 船内のさまざまな器具・装置類が分析のために取り出された。分析結果が

待たれる。

c) 宇宙船は無菌環境に置かれた。

ヒューマノイド型生物に関する医学的報告

起源：不明 — おそらく地球外

身長：4～4.5フィート（1m 20cm～1m 40cm）

肌の色：灰色がかった青。肌はすべすべで、非常に弾力性がある。

毛：いかなる体毛も欠如。

頭部：体に対する頭部の比率が人類より大きい。隆起した頭蓋骨の表面に暗青色の斑点が広がっている。

顔：頬骨が目立つ。

目：大きくて、顔の端に向かって斜めにつり上がっている。瞳が見える。

鼻：2つの鼻の穴があり、小さい。

口：唇のない細い切れ目状の口。

顎：人間のものと比べ小さい。

耳：見当たらず。

首：人間のものと比べ非常に細い。

体躯・腕：腕は細く長くて、膝の上まで届く。

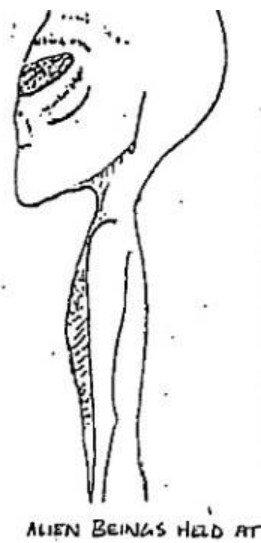
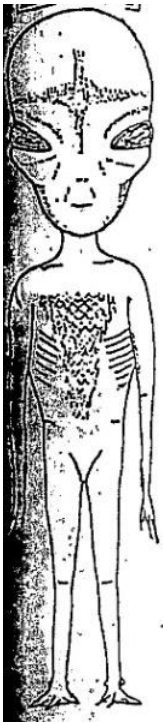
手：3本指、水かきがあり、人間の爪に似た鉤爪がついている。

胴体：胸と腹部はかすかに凹凸した皮膚に覆われている。

臀部：小さくて幅が狭い。

〇〇（注：判読不能）：外生殖器はない。

足：3本指。爪はなく、凹凸がある。



メモ：ヒューマノイドの攻撃的性質のため、血液や組織のサンプルを採取することはできなかった。（一体のヒューマノイドは医師を攻撃し顔や胸に深い切り傷を負わせた）。さまざまな食べ物を提供したが、食べることを拒否した。

（注：この描写は宇宙船を撃墜し、乗員を連行監禁して強制的に身体検査をしている粗暴な地球人側が記述していることを忘れてはなるまい。医師が腕に強引に注射器の針を刺して血を抜こうとしたり、メスで体の一部を切り取ろうとしたりする「生体解剖」的なことを大人しく受容するよう強要する権利などいっさいない。捕虜となったET側にこそ身を守る権利があるだろう。）

コミュニケーションの方法：不明 — おそらくテレパシー。

ヒューマノイドたちは空軍基地のレベル6の高度な拘留下にある。

2体のヒューマノイドはさらに高度な調査研究のため、米国のライトパターソン空軍基地に送致し、南アフリカには戻さないことが求められた。

5 ページ（結論）

A) なんら結論には至っていない。調査結果待ち。

B) 船体とヒューマノイドたちはさらなる調査研究のためライトパターソン空

軍基地に移送されることになる。

C) 移送日：1989年6月23日

メモ：結論は未定

当ファイルは予備的調査で得た初期の発見物の報告を含んでいる。さらなる詳細は南アフリカと米国ライトパターソン空軍基地の調査後に明らかになるだろう。」

(注：以上 B から A に送られてきた南アフリカ空軍情報部局のブリーフィング文書「UFO 調査日誌」の引用。以下地の文である A の文書に戻る。)

ヒューマノイドと ET 宇宙船の図が B から別便で送られてきたブリーフィング要旨に添付されていた。

この B の文書を受け取った段階で我々は NORAD (北米航空宇宙防衛司令部) もこの物体が大気圏に入ったときから追跡していたことを知らされた。

後日、我々の情報提供者 B がヘンリー・アザデデル博士と私 A にイギリスで会い、撃墜について多くの情報を提供してくれた。その情報にはこの事件に関与した米国ならびに南アフリカの将校たちの名前や、両国の科学者たちを含む民間人の名前もあった。

(注：ヘンリー・アザデデル博士 Dr. [Henry Azadehdel](#) はイギリスに住むアルメニア人の物理学博士で植物愛好家&UFO 研究者だが、蘭の違法販売で服役の過去もあるというかなり奇抜な人物。)

この情報提供者 B は以下の署名入りのコメントも書いた：

「(氏名：伏字) は南アフリカ空軍情報部・特殊調査部門のメンバーである。自宅は南アフリカ (地名：伏字) にある。添付したコードネーム黒馬(Black Horse)のファイルに含まれる情報は私の自由意志で、かついかなる強制もなしに提供することをここに誓う。私は1989年5月7日と1989年7月29日 (注：7月29日の件は詳細不明) に起こった、これらトップシークレットの作戦に関する情報を漏洩した場合いかなる結果になるか、さらにまたこの情報を少しでも漏洩することは南アフリカに対する反逆行為と見なされると警告する南アフリカ国家機密保護法関連の5つの書類にサインしたが、私はこの情報を開示しないことこそ人類に対する反逆行為であるとの固い信念から、これ

を公開する決心をした。

このファイルには24名の南アフリカ情報保安員よりなる回収チームの一員として私自身が関与した情報が含まれている。このチームは1989年5月7日にカラハリ砂漠で墜落した未確認飛行物体と生きた異星人に関する極秘作戦に関わった。

その後ライトパターソン空軍基地 Nr. 7 から米軍情報機関のメンバーが派遣され、現地の5名の南アフリカ空軍情報機関のメンバーと合同チームを結成。私もその一員として参加した活動の詳細もこのファイルに含まれる。南アフリカのメンバーは物体の回収と南アフリカ空軍（伏字）基地への移送を手伝い、さらに物体と2体の異星人を検査研究するために1989年6月23日、米国オハイオ州デイトンのライトパターソン空軍基地に移送する際も協力した。

誓って言うが問題解決のためにこのファイルに記した内容は真実そのものである。

私が信頼できる人物がアレンジしたウソ発見器の検査なら進んで受ける用意がある。検査の指揮をとる人物は政府に雇われておらず、政府といかなる関わりもないことが求められる。」

この情報提供者 B が様々な問いかけや回答を編纂したファイルがあるが、これは完成して 50 ページ近くになっている。この事件のあらゆる詳細が記録されており、この事件の〇〇な（注：判読不能）調査がヘンリー博士と私によって開始された。

現時点ではもう一人別の、非常に高い機密情報閲覧資格をもつ南アフリカ空軍情報将校とも電話によるコンタクトが取れた。この人物と話した結果、彼はこの UFO 事件を知っており、異星人たちと宇宙船が写った 4 枚の公式白黒写真（8 cm×10 cm）や、回収ならびに取り扱い方に関する指示を含んだ 50 ページに及ぶテレックスのメッセージ（ライトパターソン空軍基地から南アフリカに送られてきたもの）も手に入れられることが分かった。

彼が言うには写真とテレックスのコピーを我々に渡しても構わないが、大変なリスクを伴うので、自分に都合がいい方法をとるしかないという。彼は写真を渡す代わりに我々から知りたい情報もあると言った。そうこうするうち、南アフリカの（伏字）空軍基地に飛行中隊長ジョーンズと話したいという電話がかけられた。

その電話はつながり、以下の会話が行われた：

問い：そちらは飛行中隊長ジョーンズかな。

返答：はい、そうです。

問い：こちらは米国ライトパターソンからグラント将軍だ。

返答：はい、閣下。

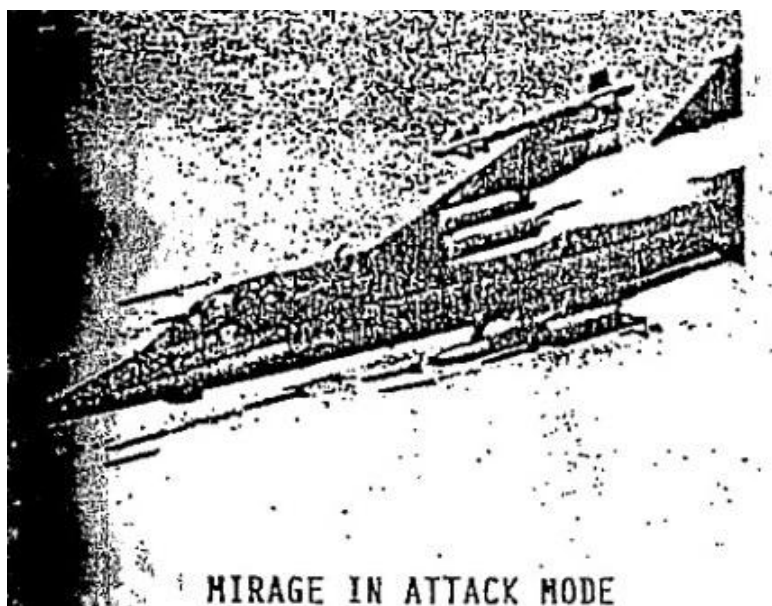
問い：中隊長、聞いて欲しい。はっきりさせたいことがある。わしの目の前に今「黒馬（ブラック・ホース）」のファイルがおいてある。君がその物体に向かって何発発射したか書かれていないんだが。

返答：今お話しなさっている方のお名前は何とおっしゃいましたでしょうか。

問い：ライトパターソンのグラン将軍だ。中隊長、単刀直入に訊く。そいつには何発発射したんだ？

返答：一度です、閣下。ちょっと待っていただけますか。別の電話に変えますので。

問い：そんな必要はない、中隊長。君はもう私の質問に答えた。



攻撃態勢に入ったミラージュ戦闘機

その後、アメリカの NORAD（北米航空宇宙防衛司令部）と連絡がとれ、航空機追尾部門にアクセスでき、担当士官との会話があった（この会話も録音された）。コンピュータに保存されたレーダー記録もあり、物体が大気圏に入り、アフリカ大陸方向に飛んで行く様子が記録されていたが、我々はその時刻に関心があった。彼らはその物体が最初に現れた空域を特定することはできなかった。その物体は何なのかと問われると、彼らは「分からないが人工衛星だったかもしれない」と答えた。

その後ライトパターソン空軍基地の特別調査局 OSI(the Office of Special

Investigation)に電話連絡し、ある人物とつながったが、この人物は南アフリカで UFO を回収したとき現場にいたので我々には知られていた人物だった（この会話は録音された）。我々は南アフリカで起こった事件のことを知っているし、彼が現場にいたことも知っているると彼に伝えると、彼は明らかに動揺し、すぐには返答がなかった。そして自分はその事件に関わっていない、それ以上のことは言えないと言った。翌日彼の所属局に電話をかけると、別の人物が出た。我々が前日話した人ともう一度話したいと頼むと、「彼はある任務のために数か月間いない」と言われた。

そのころ、我々の情報提供者 B はヘンリー博士のもとに滞在していたが、ライトパターソンに何度か電話した翌日、博士の家に南アフリカから電話があった。電話をかけて来た人物は B と話したいという。B が電話に出ると、相手の人物が怒鳴っているのがはたからでも聞こえた。

電話が終わったとき B は明らかに動揺しており、怯えていた。彼はヘンリー博士に電話の主は南アフリカ情報局の（伏字）将軍だった。そして将軍は情報局の上層部は彼が我々に秘密情報を渡したことに気付いていると言ったという。そして南アフリカに戻り情報局の将軍と面談するように命じられた。とても厳しい処分に遭うだろうという。

ちなみに、米軍内の情報通によるとオハイオ州デイトンのライトパターソン空軍基地の特別区域で UFO が到着する予定の日に防衛準備態勢 (Defense Conditions) 宣言の警報が発布されたということだ。この種の警報は通常マスコミの好奇心を引かないように控えめにするのだが。

当時我々の情報提供者 B は自分の写真付きの国防情報局パスを手に入れており、それを使ってライトパターソン空軍基地にアクセスすることができた。彼はそのほか NASA の身分証明書も手に入れていて、それを使って基地にアクセスすることもできた。

我々の調査中、南アフリカ情報部局や、南アフリカ大使館からたくさんの電話がヘンリー博士の家にかかってきた。中には真夜中にかかってくる電話もあった。アフリカーンス語、つまり南アフリカの言語 (注: 17 世紀後半にオランダ語から派生した西ゲルマン語) で交わされた会話も多かったが、それらは録音され、後日その録音テープが翻訳された。彼らの会話から分かることは、この事件が南アフリカに実に多くのトラブルをもたらしたということだ。UFO と異星人の写真やテレックスのメッセージを我々に送る約束をしてくれた情報源の人物もアフリカーンス語で電話をしてきて、ヘンリー博士のもとに滞在している B と会話をした。これも録音してある。

この会話の中でBは上層部が自分のやっていることを把握しているので怖いと言った。彼らはこの件に関わった者全員を把握しており、自分は司令部に呼び出されて、お前は仕出かしたことでどんな目に遭うか分からんぞと警告されたという。彼はまたセキュリティ・サービス以外は彼が今どこで活動しているか知らないはずだ。その情報を我々の情報源の人物が漏らしたことにひどく失望していると語った。

このあとも南アフリカとアメリカ合衆国の双方に多くの電話連絡が行われた。そしてヘンリー博士が南アフリカの事件に関する情報を求めてライトパターン空軍基地の特別調査局（OSI）に電話をかけた時は以下の返答があった：

OSI：この件に関するあなたの興味は認めますが、我々はこの特殊な事件についていかなる知識も持ち合わせていません。私はそんなことがあったと認めることも否定することもできない。この調査局には私が調査を頼める部署がいくつかありますが、博士に認識していただきたいのは、私は軍隊のために働いているのであり、もしこの事件が実際に起こったとしても、あなたにそれを認めることはできないということです。

ヘンリー博士：私はこの情報を南アフリカ情報局の高いランクの情報源から得

ています。私の興味には科学的な側面もあります。私はこのテーマを何年も手掛けているのです。

OSI: あなたがおっしゃっていることは分かりますし、あなたの興味も理解できますが、あなたは〇〇のインパクトも認識していただかないといけない—

(注：ここで原稿が中途半端に終わっており、つづきのページはこのファイルにない。)

あとがき

南アフリカで1989年5月7日に起こったこのUFO撃墜事件のことは2024年3月14日にグリアが行ったセッション8の講演で言及されたとき初めて知りました。講演ではモニターに資料の前半が写し出されていましたが、撃墜のいきさつがあるはずの後半部分がありませんでした。電磁スカラーパルス砲が南アフリカの空軍機にも搭載されていたのかどうかを知りたかったのですが。

そこでCSETIが公開しているアーカイブを調べたら、この事件関連の複数のファイルが見つかり、グリアがモニターに写した資料の後半部分も入手でき

ました（それも最後は途中で途切れていましたが）。

[Archive](#)/Categories: UFO Crash Retrievals/South Africa/South Africa UFO

Crash ref.2.pdf

この資料はコピーをネットにアップしたのですが、左端の単語の前半部分が見えなかったり、右端の単語の後半部分が見えなかったりで、読み取るのに苦労しました。どうしても読めない箇所は〇〇にしてあります。

私が知りたかった UFO 撃墜に使われた武器に関しては、B がリークした「UFO 調査日誌」で「実験的に航空機に搭載された雷神 2 レーザー機関砲 (experimental aircraft-mounted Thor2 laser cannon)」とあり、A のメールでは「実験的に電磁波誘導放射によるマイクロ波増幅した機関砲 experimental maser cannon」と言っています。UFO を撃墜できる通常のレーザー砲はないので、これは電磁スカラーパルス砲のことをスカラーという言葉を使わずに言った表現だろうと思われます。

結論としては電磁スカラーパルス砲は 1989 年時点で南アフリカ空軍機に実験的に搭載されていたらしいということになります。

B が A に送った手紙には、南アフリカ空軍基地司令が 1989 年 5 月 7 日に

撃墜した UFO は「過去 10 年間に南アフリカで回収した 3 機目になる」と言
ったとあります。

そして UFO を撃墜すると、すぐさま UFO 関連で有名な米国のライトパター
ソン空軍基地から米軍情報機関のメンバーがやってきて、結局 1989 年 6 月
23 日に UFO も異星人もライトパターソン空軍基地に運び去っている。

UFO 関連でこんな協力関係を結んでいる南アフリカのプレトリア空軍基地
は軍産複合体 USAPs の息のかかった基地という他ないです。

グリアは USAPs の施設のある場所を世界地図で示していますが、そこに南
アフリカは挙がっていない。UFO を撃墜している南アフリカのプレトリア空軍
基地は地下施設を備えたような大掛かりな施設ではないからだと思います。

USAPs から「実験的に」と言われて供与されたスカラー砲をミラージュ戦闘
機に搭載し、UFO が飛んでいれば撃墜して USAPs 関連の米国ライトパターソ
ン空軍基地に運ぶ手伝いをしているわけです。

本論のきっかけは UFO 回収情報を知る立場にあった人物 A がグリアの UFO
機密情報開示運動ディスクロージャーに賛同し、グリアの主催する UFO 研究セ
ンターである CSETI に加わりたいというメールを送ったことにあります。

そして A は南アフリカ空軍情報部・特殊調査部門のメンバーである B から 1989年5月7日に南アフリカで起こった UFO 撃墜事件の詳細が載っている「UFO 調査日誌」をリークしてもらった。それは南アフリカ空軍情報部局内のブリーフィング用の書類だった。

B は自身 UFO 回収業務に関与していて、秘守義務の書類にサインもしていましたが、UFO・ETの真実を秘守することは人類への反逆であるとの信念から「UFO調査日誌」をリークしたのでした。

A は UFO に強い興味をもっている物理学博士のヘンリー氏とともに B とイギリスで直接会って、多くの情報を得ている。

B はヘンリー博士のもとに身を寄せていましたが、南アフリカ情報部局の将軍が電話をかけてきて情報漏洩の件で B を怒鳴りつけ震え上がらせる。

B は将軍のもとに行って直接面談を受け、叱責を食らったようですが、どのような処分を受けたかは不明です。

またヘンリー博士は南アフリカ当局などに電話をかけて UFO 情報収集活動を盛んにしていましたが、南アフリカ当局からどのようにみなされていたかも、A の文章からは明確でない。

さらにヘンリー博士たちは米国のライトパターソン空軍基地にも何度も電話をしています。基地の特別調査部 OSI に電話したことは記録がありますが、空軍内部の情報通と連絡し合っている可能性もあります。それもいまひとつ明確ではない。

機密と関わる情報の扱いにこのようにもどかしい側面があるのは仕方ないのかもしれない。

なおヘンリー博士と OSI との会話は録音されており、その元原稿がアーカイブの別のファイル(Henry Azaddehdel UFO crash South Africa 10/7/1989.pdf)にありました。なお会話の日付はファイル名とは異なり 1989年9月15日になっています。

この元原稿と比較すると A が文書に記した会話は要約したものと判明しました。会話をそのまま起こした元原稿を読むと、ヘンリー博士は2体の異星人のことも語っていて、1体は直後に死に、もう1体は輸送中に動かなくなったという。

この事件を精力的に追究していた博士はそのような情報も入手していたのだと思われますが、遠くの星からやってきた異星人が受けた酷い扱いに胸が痛みみます。

博士は続けて、この異星人はクラシックなグレイと言われるタイプで、レティキュリー星系から来ていると言っている。CSETI のディスクロージャー運動もまだ始まっていない 1989 年ごろの認識としてはやむを得ないですが、間違った認識と言わざるを得ません。彼の言う「レティキュリー星系から来ているグレイタイプの異星人」は実は USAPs が地下施設で製造している人工のロボットであることをスティーブン・グリアが複数の内部告発者から確認しています。違法グループ USAPs は反重力装置で飛ぶニセの人工 UFO を使ってアブダクションを繰り返し、実際は平和で高度な精神文化をもつ異星人にネガティブな印象付けをしているのです。

なお 2025 年 2 月上旬に米国トランプ大統領は南アフリカの白人が逆差別されていると言って南アフリカへの援助停止の大統領令に署名しましたが、USAPs 組織の横のつながりは表の政治経済のつながりとは別に存在しています。

以上